韓国の社会福祉事業

――明暉園――

宇都宮　みのり

はじめに

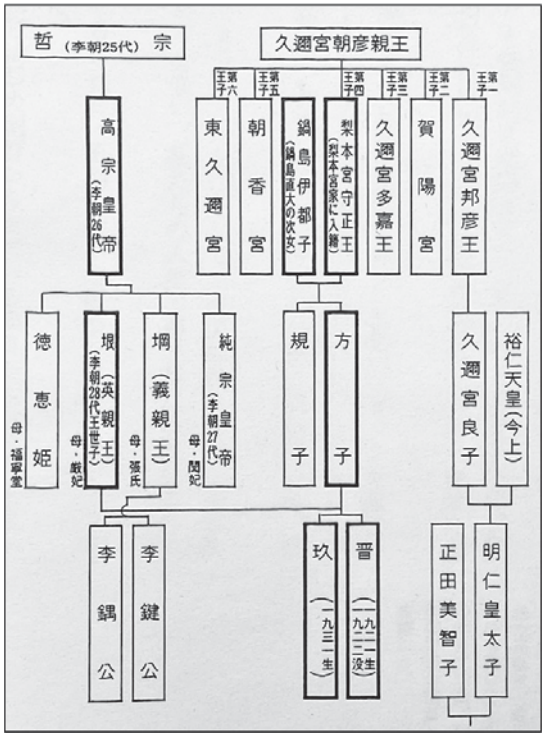
2019 年 11 月 17 日、ソウル市内から地下鉄で 1 時間半ほど南下した安山市にある社会福祉法人明暉園（ミョンヒイウォン）を訪ねた。同法人は、「知的障害者居住施設・明暉園」、「身体障害特殊学校・明恵学校」、「障害者勤労事業所・海東の職場」、「知的障害者共同住居・明暉共同生活家庭」、無料で給食を提供する「鍾路分園」、そして「明暉スポーツセンター」を有する、50 年余の歴史がある社会福祉事業施設群である。

「私たちはイ・バンジャ様を敬愛しています。その遺志を私たちは今も大切に受け継いでいます。」案内をしてくださった事務局長は開口一番におっしゃられた。李方子（い・まさこ、イ・バンジャ）が戦中戦後の日韓の不幸な歴史の中で生き、晩年に「明暉園」を設立したこと、今もその遺志が継承されていることを知らない人も多いのではないか。「戦争直後の日韓関係が最悪の時期に、あえて二国間の架け橋になろうとした女性」（水口　2009）、朝鮮李王朝最後の皇太子妃であった李方子（1901−1989）が設立した明暉園について紹介をしたい。

李方子は自伝として、『動乱の中の王妃』（李　1968）、『流れのままに』（李　1984）、『歳月よ王朝よ　最後の朝鮮王妃自伝』（李　1987）を書き残している。李方子に関する単行本としては、本田節子『朝鮮王朝最後の皇太子妃』（本田　1991）、渡辺みどり『日韓皇室秘話李方子妃』（渡辺　2007）等がある。論文としては、山崎朋子（山崎　2007a；山崎　2007b；山崎　2007c）、渡辺みどり（渡辺　2010；渡辺　2015）の他多数見られる。映画では、2007 年に「虹を架ける王妃―朝鮮王朝最後の皇太子と方子妃の物語」で菅野美穂が方子を演じている。テレビ番組としては 1995 年に「知ってるつもり」で「李方子」を、また 2015 年に NHK BS スペシャルで「“韓国の母”になった日本人～朝鮮王朝最後の皇太子妃・李方子～」を特集している。これらの文献・資料から、日韓両国の激動の歴史にはめ込まれて生きざるを得なかった李方子の、数奇な運命を追うことができる。ただしこれらは晩年の方子の韓国における福祉活動についてはほとんど触れていない。韓国における方子の福祉活動を論じているのは、水口の「戦後韓国における日本の皇族方子の活動―韓国福祉活動を中心に―」（水口　2009）のみである。水口は第二次世界大戦後の方子の韓国での活動とその活動の韓国の社会福祉への影響を詳細に調べ上げている。ここでは筆者が施設訪問時に得た情報と、上記先行文献をもとに李方子と明暉園を紹介する。

1．李方子の結婚（「日鮮融和」の礎として）

1901 年、方子は梨本宮守正と伊都子夫妻の第一王女として生まれる（資料 1）。学習院女子部中等科に入学した翌年、裕仁親王（昭和天皇）の有力な妃候補として名前が挙がるが、1920 年、方子 19 歳で朝鮮の李王朝 26 代高宗皇帝の王子英親王李垠（イ・ウン）に嫁ぐ。「陛下のおぼしめし」という「大磐石の重み」がある言葉に逃れることは出来ず、「世の中のことはなにもしらないうら



資料 1　方子の家系図
（李方子『歳月よ王朝よ』（李　1987）48 頁より）

若い乙女が、ただお国のためにとおしつけられた思いもかけぬ結婚、しかもそれは一言の相談もなく決められ、一生を犠牲にしてしまう運命（梨本　1968）」となる結婚であった。

李垠は 1897 年に李朝 26 代高宗皇帝の第 3 皇子として生まれる。日露戦争後、王世子（皇太子）に立った垠 10 歳の時に、日本政府は垠の日本への留学を強く要請した。伊藤博文（初代韓国統監）による、皇太子であった垠を日本で教育し、「日韓両国の礎」とする計画に基づくものとされる。そして「日鮮融和」の名分による結婚を強いられた。

「二人の人間としての結びつきと愛情の深さ」によって「夫婦としての二人の生活はむしろしあわせ」（梨本　1968）であり、方子は垠との生活を「夢のような結婚生活」（李　1987）と振り返る。しかし 1922 年の覲見の儀（朝鮮での結婚式）での長男晋（チン）の急逝の報に、「晋が日本人の血を享けているがゆえに死ぬのであれば、なぜ私を死なせてはくれないのか」（李　1987）と嘆き、1923 年の関東大震災の時に起こった朝鮮人大虐殺事件を知り、朝鮮の人々への「ぬぐいえぬ負い目」（李　1987）を負う。方子は日韓両国の悪化する関係の中で苦難を強いられた。

1945 年 8 月 15 日、第二次世界大戦が終わる。韓国と日本に挟まれていた李王家は、日本の皇室との関係が絶たれると同時に、日本政府から宮家への経済的援助が絶たれたことでただちに生活に困窮する。さらに 1947 年に臣籍降下が決定し、李王家は王族の身分を離れることになる。方子は在日韓国人として登録されたことで、「はっきり日本から放り出された」（李　1984）と実感する。「日鮮融和」「お国のため」という「おぼしめし」の重責は戦後の混乱とともに消え、身分剥奪と生活困窮が残った。

2. 明暉園の設立（夫の遺志を継いで）

戦後の初代大統領、李承晩（イ・スンマン）は徹底した排日政策をとったため、李政権下の 13 年間は、李夫妻は韓国に帰国することはできなかった。李大統領が失脚して次の大統領、伊澮善（ユン・ボソン）は新たな日韓関係樹立を目指し、徐々に日韓関係は変化する。そして朴正熙（パク・チョンヒ）大統領の時代になって「日韓国交正常化交渉」が本格化する。その中で、垠の病気の療養費と夫妻の生活費は、韓国政府が援助することとなった。そして李夫妻は 1963 年にようやく韓国への帰国を果たす。

垠は、常々「帰国したら社会福祉活動をしたい」と方子に話していたという（李　1984）。方子にとっても、祖母鍋島榮子が元日本赤十字篤志看護婦人会会長であり、母梨本宮伊都子も皇族の公務として同婦人会の活動に参加していたことから、方子も王族妃として日本赤十字の様々な活動に参加した経験があった（水口　2009）。さらに方子は、「韓国人ではあっても、日本の血を受けている私には、私なりに、心の中にもっている償いを、少

しずつでも果たさなければならない」と考えており、「韓国の社会が少しでもあかるく、一人でも不幸な人が救われるように祈りながら、小さい石をひとつずつ積むように、ささやかであっても力をつくしていきたい」という悲願（李　1968）を抱くようになる。そして方子は、病床の夫の積年の夢と自分の悲願を叶えるべく、韓国で社会福祉事業に生きる方向を見出していく。まず方子は、韓国帰国の準備として、1960 年に日本で福祉団体日本慈行会を発足させた。日本慈行会は、年会費 3 万円以上の特別賛助会員およそ 30 名で運営されるものであった。

李夫妻が帰国した当時の韓国では、養護学校や特殊学級などの障害児教育はほとんどなされていなかった。方子は垠の看病の傍ら、大韓赤十字社に入会する。さらに 1966 年、心身障害児施設への援助をするために、韓国でも社団法人慈行会を発足させた。創設メンバーは南宮映（造船公司会長夫人）、明桂春（斗山グループ会長夫人）、韓キジュ（ピアニスト）である（李　1987）。韓国慈行会は、年会費 6 万ウォン（約 1 万 8 千円）の名誉会員 22 名の他、400 名余で構成されていた（渡辺　2007）。韓国慈行会の運営は厳しく、日本慈行会が年 1 回観劇会を催し、その利益（年間およそ 100 万円）を韓国慈行会に寄付している。方子の役割は福祉事業に充てる寄付を集めることであり、そのために日本を縦断して奔走し、自ら手掛けた七宝、磁器、絵や書などの作品を持って展示会やバザー等を催して販売している。

1967 年、方子は YMCA が貧民救済事業として行っていた「保隣会」を譲り受ける。ここを「明暉園」と改称し、耳の聞こえない子どもや小児麻痺の子どものための施設とした。これが現在の明暉園の前身である。「明暉」とは垠の雅号である。

1971 年、明暉園は京畿道光明市鉄山洞に新築され、社会福祉法人として認可された。ここでは本科と実習科に分け、本科では 13 歳から 18 歳までの身体障害者に 1 年間の基本教育と実習を指導し、実習科では本科を卒業した学生に技術者として「独り立ちできる技術」を指導した（李　1987）。明暉園設立の前に方子はこう語っていたという。「いくら IQ が低くても、その子供なりの能力があるはずでしょう、（中略）子供たちに残っている自立能力をひき出し、育ててあげなければならないのです。残された能力を開発すれば、仕事の内容によっては健常者より向いている仕事だってあるはずです（本田　1991）。」

設立当初から「独り立ちできる技術」を身に着けること、そして「卒業」することに主眼を置いていたことを、現在の事務局長は誇らしいと話す。障害者は主体的な生活というよりも一方的な保護の対象という認識があった時代である。自立生活運動（IL 運動）が障害者の自立生活の権利を主張したのは 1970 年代のことであり、国連が「障害者の権利宣言」を採択したのは 1975 年、完全参加と平等をテーマとした「国際障害者年」を制定したのが 1981 年である。また ILO が「障害者の職業リハビリテーション及び雇用に関する条約」を採択したのは 1983 年である。1960 年代後半の方子の考え方がいかに先進的であったかがわかる。この知的障害のある子どもたちに対する愛情と理念は今の明暉園に連綿と引き継がれている。

3. 現在の明暉園

現在の社会福祉法人明暉園（写真 2）は韓国京畿道安山市常緑区海岸路 865 に位置する。理念は、「イエス・キリストの教えに習い、身体的・精神的な障害により苦しんでいる人々と生活を共にし、彼らが自活できるよう援助すること」、そして「李方子女史の遺志を受け継ぎ、障害者たちの社会復帰と自活のための職業教育に全力を注ぐこと」にある（社会福祉法人明暉園）。運営費は、1981 年の「国際障害者年」制定をきっかけとして、国からの補助を勝ち取り（李　1984）、現在はほぼ全額韓国政府からの拠出である。

同法人が擁する「知的障害者居住施設･明暉園」では、「知的障害者の幸せな暮らしのために利用者の選択決定権を土台にした多様な活動支援サービスを体系的、専門的に提供し、社会心理領域、

写真 1　昌徳宮における李方子
（出典:『佳恵 李方子女史 追慕 20 周年記念画報集』非売品）

作業領域、日常領域、医療領域に区分して支援」しており、入所者 80 人に対し従事者は 41 人の配置（明暉園配布資料 2012 年）である。

「中・高専攻課程身体障害特殊学校・明恵学校」では、「カトリック的人格教育による健康な自活人の育成を教育目標として、身体障害学生たちに社会体験と幅広い思考力、そして円満な人間関係の教育に主眼を置いている特殊教育機関で障害学生たちが共同生活を通じて自分より苦しい隣人を愛して自分の夢とビジョンを発見し、民族と世界を抱いて進む人材養成」を行う。入学資格は小中高課程を卒業した重複障害学生である。

「障害者勤労事業所・海東の職場」では、「就職が難しい障害者が自立及び生産活動に寄与できるよう支援」しており、勤務服や作業服の縫製等をしている（写真 3）。

「知的障害者共同住居・明暉共同生活家庭」は、「女性の成人知的障害者が地域のアパートで共同生活をし、社会で自立できるように日常生活および社会生活技術を学ぶ」場であり、「自分のニーズに合った余暇、趣味活動を支援し、社会構成員としての自信を持てるように一緒に努力」する場である。

「鍾路分園」は、2011 年からソウル市鍾路区で、

写真 2　現在の明暉園（筆者撮影）

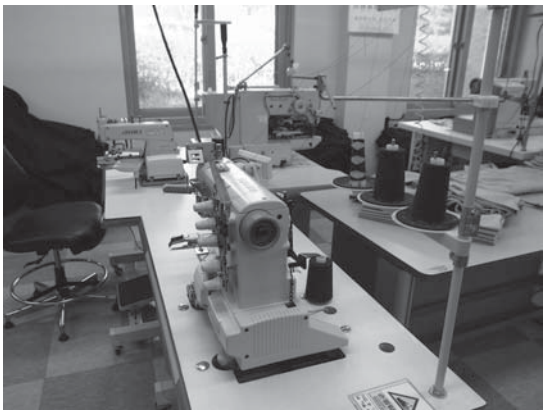


写真 3　海東の職場内部（筆者撮影）

身寄りのない老人（一日平均 150 人余、月平均 3,000 人余）のために無料で給食を提供する事業である。

「明暉スポーツセンター」は、障害者だけでなく、地域住民にも開放されているスポーツ施設である。体育館のほか 1970 年代オランダで開発された精神安定療法 snuzren を用いた部屋（写真 4）などの設備もあり、専門職によるプログラムが提供されている。

明暉園は、2000 年に障害者職業リハビリテーション施設評価優秀施設に選定、2004 年に全国障害者生活施設評価全国 1 位に、2005 年に全国障害者生活施設最優秀施設に選定、大統領表彰を受賞、2008 年に保健福祉部長官表彰受賞、2010 年に全国障害者居住施設評価最優秀機関に選定さ

写真 4　明暉スポーツセンター内部（筆者撮影）

写真 6　表彰状の数々（筆者撮影）

写真 5　明暉記念館入口（筆者撮影）

写真 7　明暉記念館内部（筆者撮影）

れるなど数々の表彰を受けている。附属の明暉記念館にはその表彰状や現在の活動に関する資料のほか、方子に関する史資料が大切に保存・展示されている（写真 5〜7）。

おわりに

日本の皇族に生まれ、「花につつまれた」日々を送っていた方子が、「日鮮融和の礎」として政治的な結婚をし、終戦とともに地位や財産、国籍まで失う。朴政権下において李夫妻は帰国を果たし、まもなく垠と死別した後の方子は、韓国を祖国として、障害のある子どもたちのための福祉活動に専念した。方子が 1989 年 4 月 30 日に 87 歳で逝去した時、韓国の新聞は「自らの不幸な人生を社会活動への献身で美しい人生に変えた」と報じたという（渡辺　2007）。方子晩年の約 20 年間に韓国において福祉活動に注いだ情熱は韓国政府に評価され、国民勲章槿章（勲一等）受賞につながった。葬儀は韓国皇太子妃の準国葬として執り行われた。

施設内見学を終えて、改めて方子の人生から学ぶことの多さに圧倒された。明暉園施設内の部屋や廊下の壁など至る所に、方子の胸像、写真、刺繍、編物、絵画等が飾られている。障害のある人たちへの愛情を注ぐ職員や方子を慕う子どもたちの様子は、方子が今もここに生き続けていることを思わせる。

事務局長は、明暉園は特別だと繰り返し言う。それは現在も韓国の障害者福祉施策は十分ではな

く、明暉園は韓国の事情を表す施設ではないという意味である。明暉園は今も、自立を目指した設立当初の先進性そのままに、韓国の障害者福祉の実践を牽引する役割を担っているということであろう。

案内してくださった事務局長に深謝したい。

引用文献

（1）本田節子（1991）『朝鮮王朝最後の皇太子妃』、文芸春秋.
（2）李　方子（1968）『動乱の中の王妃』、講談社.
（3）李　方子（1984）『流れのままに』、啓佑社.
（4）李　方子（1987）『歳月よ王朝よ』、三省堂.
（5）水口智鶴（2009）「戦後韓国における日本の皇族方子の活動：韓国福祉活動を中心に」『法制史学』71、86−106.
（6）梨本伊都子（1968）「老いたる母の願い」李　方子編『動乱の中の王妃』講談社、245−6.
（7）社会福祉法人明暉園『社会福祉法人明暉園パンフレット』非売品.
（8）社会福祉法人明暉園『佳恵　李方子女史　追慕 20 周年記念画報集』非売品.
（9）渡辺みどり（2007）『日韓皇室秘話　李方子妃』、中央公論新社.
（10）渡辺みどり（2010）「8・29 日韓併合 100 年　歴史秘話　李方子妃―朝鮮王朝へ嫁いだお姫さま　愛と運命」『週刊朝日』115（40）、33−5.
（11）渡辺みどり（2015）「日韓歴史秘話　朝鮮王家に嫁いだ宮様の苦悩　李方子妃は私に語った」『正論』（521）、284−93.
（12）山崎朋子（2007a）「新連載　アジア女性交流史・昭和期篇（1）二つの人身御供婚（上）李方子と愛新覚羅浩」『世界』（760）、230−44.
（13）山崎朋子（2007b）「アジア女性交流史･昭和期篇（第 2 回）二つの人身御供婚（下）李方子と愛新覚羅浩」『世界』（761）、278−89.
（14）山崎朋子（2007c）「新連載　アジア女性交流史・昭和期篇（1）二つの人身御供婚（上）李方子と愛新覚羅浩」『世界』（760）、230−44.